

はじめに

昨年（昭和五三年）の暮、ゼミを担当している四回生のI君が、私のところへやってきて、いかにも云いにくそうな顔をしながら、「ちょっとお伺いしたいことがあるんです」、「どういうことかね」と聞くと、「実は郷里の役所に就職したいと考えているんですが、面接の際に『地理学の意味』について聞かれそうなんです。それで地理学の概略について教えて下さいませんか」と。「君がこれまで習ったこと、それから自分自身で勉強してきたことについて、うまくまとめてしゃべったらいいだろう」と云いたいところではあったが、それでは少々無責任すぎる。

よく考えてみると、私自身、いまだに地理学の意味について、要領よくまとめることができないし、また内外の標準的なテキストに書かれている地理学の本質論と、地理学者によって現実に行なわれている研究内容との間に、大きい開きがあることも知っている。そこで、自己反省をかねて、地理学の現状と問題点について、しばらくの間I君と話し合うことにした。地理学そのものもつ性格なのか、あるいはそれを行なうものの責任なのか、そのへんのはあまりはつきりしないが、いずれにせよ、地理学は「全体像が不明確な科学」なのである。したがって隣接する諸科学において、また

現実社会の人びとによっても、じゅうぶんには知られていないし、多少の誤解も生んでいる。

ところで、「あなたの専門はなんですか」と正面きって聞かれたときにも、即答に窮する。弥生時代ころから歴史時代にかけての人間活動のあとを、自然環境とりわけ地形環境との関係から把握しようとする私の立場は、地理学の伝統的な分類からいうと、どの分野にもあてはまらない。自分の研究内容を総称するにふさわしいことばが見当たらないので、やむをえず「地理学をやっています」と、これまた曖昧な返事をくり返しているのが実情なのである。

地理学の本質をみつめて歩んできたつもりではいるが、こういう始末であるため、学会事務局から与えられたテーマに⁽¹⁾ふさわしい内容のものを書くことはとてもできそうにない。そこで、私自身がこのような研究を行なうに至った経緯とこれまでの研究視点・研究方法、それから現在考えていることなどについて、簡単に整理するにとどめざるを得ない点を、あらかじめおことわりしておきたい。

一、地形研究への道

過去のさまざまな時代における人間活動のあとを、地形環境と関連づけて復原してみようと思いたったのは、きわめて素朴な動機による。すなわち「地理学は土地と人間に関する科学である」、それから「人間と自然環境との関係はきわめて歴史的といえる」。以上の短かい二つの文章に述べつくされているのであるが、これではあまりにも舌足らずなので、学生のころくり返し読み、また赤鉛筆で線をつけたりもした文献のうちから四点のみをとりあげ、少し具体

的に述べてみた。

「……歴史地理学者は、立派な自然地理学者であり、生物地理学者でなければならぬ。なぜならば、自然地理と生物地理は、他のすべての研究の基礎を形成するものであるから。……」(J・B・Mitchell)⁽²⁾。一般的には、生物地理学は自然地理学に含まれると解すべきであるが、J・B・ミッチェルはこれをつぎのように位置づけている。すなわち「自然地理学に分割されたときの自然界の地理は、自然界に属する場所の要素に関係し、また物理的な科学と関係をもっている。生物の地理学すなわち生物地理は、生物界に属する場所の要素に関係し、生物的科学と関係をもっている。そして土壌地理学はこれら両グループの中間に存在する。」と。これは歴史地理学の研究に対して一つの方向を示すものといえる。しかし残念ながら、私はこの提言のうち、地形環境について若干の研究を行なってきたにすぎない。

谷岡武雄教授⁽³⁾は、自然地理学の重要性について「……人文地理学の優位は主張されてよい。しかし、自然地理学を全く捨て去るべきではなく、人文地理学の基礎として必要欠くべからざるものである。地表空間という意味での自然を忘れて、人文地理学は成立しない。」また地形研究に限ると「……環境の科学としては、人の住まない山よりも、人間の活動舞台としての平野の研究の方がより重要である」、「……少なくとも地理学の統一性を保とうと努める限り、それは環境としての地形の研究であることを、充分意識しておらねばならぬ。」などと述べている。

地形そのものとのとらえ方については、R・J・ラッセルの見解⁽⁴⁾

“Geographical Geomorphology” が大に参考となつた。ラッセルによると、地理学徒にとって必要なのは正確な、そして実地的なインフォメーションである。すなわち“いかなる地形が現実存在するのか”、“それは他の地形といかに異なるのか” “それはどういう位置に存在するのか”、“それはどのような分布形態を示すのか”などが、この概念の中心をなしている。ラッセルは、さらに「われわれの研究に役立つ多くの地形的な考え方は、本来地理学者、地質学者、あるいは地形学者と自分自身では考えていない研究者、すなわち林学者、土壌学者、植物学者、水文学者などからより多くのものが与えられている。」と語り、きわめて実地的な、そして有用な地形学はオランダ、ベルギーなど低地国において発達しつつあるとも述べているのである。具体的には森林の伐採、泥炭地の開発、水路の建設と破壊、道路形態の変化などが土壌や景観にどのような影響を与えたかなどに対する研究が、「地理的である」としている。

昭和三十一年に刊行された中野尊正教授の著書『日本の平野』⁽⁵⁾は、私に大きい感銘を与えた。この著書からは研究視点に限らず、地形図の読図、空中写真の判読、表層地質の研究、考古学関係資料の利用など、古環境復原に必要な技術や方法について、教えられるところがきわめて大きかったのである。

二、二次的・歴史的地形を求めて

古くから人びとが居住し、生産活動が集約的に行なわれてきたわが国においては、平野の微地形は自然による物理的作用そのままを示

すものではない。そこには人間によって干渉が加えられた自然のプロセス、それから人間の力のみによってつくりあげられた地表景観が多い。したがって、そのような地形を研究するには、自然的資料に限らず、人為的資(史)料の両者を用いる必要がある。

このような視点にたつて、昭和四〇年代前半までに行なつた研究の一部は、拙著「平野の地形環境」⁽⁶⁾のなかでまとめて発表した。地形図の読図、空中写真の判読、地質資料の検討、考古学関係資料および古文獻、古地図の利用などが共通した方法である。まず四国の那賀川下流域平野については、過去のさまざまな時代における地形環境を間接的に知る方法の一つとして、微地形分類図を作成したのち、とくに河道の人為的改変とそれに伴なう海岸線の変化について検討を加えた。時代の異なる古地図、地籍図、年代の異なる地形図、空中写真などを比較した結果、この平野の海岸線は円弧状から直線状となり、さらに現在みられるようなカスプ状の輪郭を呈するに至つたことが明らかとなつたのである。

紀ノ川下流域平野については、微地形分類図を新しく作成したのち、空中写真の判読、地籍図に対する検討、さらに現地調査などによつて旧河道を検出し、古記録にもとづいてそれを変遷史的に系統化した。また検出しえた旧河道を一時的なもの、長期間継続したものの、それから特殊な地形型としてのポイントバーの三つのタイプに類型化し、それぞれのタイプの河跡が人間活動に対してもつ意義について一定の考察を行なつた。なお、河道変遷については、その後研究をすすめた結果、従来の自己の見解を裏づけうる。さらに多くの証拠が得られたので、近いうちに改めて発表する予定である。

河跡の類型化については、時代認定の点で、より説得力の大きい方法をあみ出す必要があると考へている。

大井川下流域平野の研究においては、微地形分類図を作成したのち、微地形と洪水のタイプや集落立地との関係をとらえようとした。この平野には、洪水への特殊な対応形態としての三角屋敷がある。そしてこの三角屋敷の分布と激しい洪水の発生地域との間には密接な関係がみられる。すなわち、扇状地性を示すこの平野では、上流から中流にかけて個人防衛としての三角屋敷が点在し、下流部では、共同防衛を物語る輪中(現在はほとんど消滅している)が存在するのである。

これら三地域の研究において、共通して行なつた方法の第一点は、自転車による周到なフィールドワークである。自転車は弾力性にとみ、とくに平野の微地形を肌で感じとるのにきわめて好都合であつた。つぎは、隣接科学の成果を単に引用するにすぎなかつた点である。紀ノ川下流域に位置する太田・黒田弥生遺跡の発掘に加つたのを除けば、それまでの方法は共同研究という名で呼ばれるべきものではなかつた。ポーリングのばあいも同様で、既存の柱状図を蒐集・解釈するにとどまり、新しく自分で行なうことはほとんどなかつたのである。

考古学者からの呼びかけ、市史編さんへの参加などに伴ない、隣接科学の研究者と共同調査、共同討論を行なう機会が徐々にふえてきた。昭和四五年ころからのことである。調査結果も、地理学以外の会合、あるいは誌上を利用して報告することが多くなつた。⁽⁸⁾調査地は河内が中心であつたが、たとえば石川下流域⁽⁹⁾では、「応神陵」

築造当時の微地形を復原し、築造にともなう直接的改変、さらにその後における地域全体の地形変化などについて検討を加えた。研究方法に従来と大きい違いはなかったが、表層地質については、既存の資料を蒐集、解釈するにとどまらず、一五〇センチの検土杖を用いて新しい堆積物を徹底的に調べた。また発掘現場をたずね、考古学者から絶えず情報をとり入れ、かつ現地討論を重ねた。さらに、泥炭層や黒色粘土層に対する¹⁰14Cの測定、花粉分析、遺物の年代決定などを行なった結果、過去のさまざまな時代における自然環境や人間活動の有様を、それまでよりかなり詳細に把握することができた。たとえば、「応神陵」の南に隣接し、両側を段丘によって囲まれたふところ状の地点では、過去約三〇〇〇年間における土砂の堆積量が三五センチ（年間〇・一二ミリ）であるのに対し、石川左岸に位置する氾濫原の一角では、一八〇〇年間に三〇〇センチ（年間一・七ミリ）という値を示している。

三、共同研究と自己の主体性 ―むすびにかえて―

最近、J・C・クラフト⁽¹¹⁾は「古地理ないし古環境復原における将来の発展は、個々の科学の『核』にあるのではなくて、それらの間の『接触面』において見出される。」という意味のことを述べている。この言葉は、各科学が主体性をもちながら、換言するならば、固有の独自性を発揮しながら、共同研究を行なうことの必要性を提唱していると解することができる。乏しい経験ではあるが、私は考古学者との共同研究によって、比較的新しい時代における地層の年代比定に、精度を加えることができた。しかしながら、層相の細分

化になお大きい開きがあることは否定しえない。また考古学者は、地形や土性を不変に近いものと考え勝ちであるが、この点については、地理学の立場から変化をとげた事例を、具体的に示していく必要がある⁽¹²⁾。

ところで、わが国のばあい、これまでのところ考古学者や歴史学者との共同研究の体制は、必ずしもじゅうぶんではなかった。何故であろうか。考古学との関係に限ってみると、従来、この科学においては、研究の重点が「場所」ではなくて「もの」におかれてきた。他方、地理学のサイドでは、自然地理学者は人間の存在ないし行為とは全く関係のない、きわめて古い時代の地形形成や地形変化の研究に没頭しており、歴史地理学者の多くは、地形に対してあまり考慮を払おうとはしなかった。ここに両科学間のギャップを大きくした主要な原因がある。

ところが、近年になって、大規模な住宅地開発、道路建設、河川改修などが急速にすすみ、それに伴って広域な発掘が緊急に行なわれるようになった。さらに板付をはじめ百間川、垂水、服部、北堀池、新保などにおいて、水田址と考えられる遺構が⁽¹³⁾つきつきと発掘されるに至り、考古学界においては、従来の研究方法および見解を大幅に改める必要にせまられているようである。地理学界においても、最近になって新しい技術がとり入れられ、微地形の性格、堆積物の物理的・化学的・生物的特性、さらにその年代と堆積機構などについて、より詳細に分析しようとする傾向が⁽¹⁴⁾つよくなってきた。今後は若い研究者を中心に、両分野間に残るギャップを埋めるための努力が重ねられていくものと考えられる。（立命館大学文学部）

注

- (1) 学会事務局からのテーマは、歴史地理学と個人の研究との関係に於いてであった。
- (2) Mitchell, J. B.: "Historical Geography" (金崎肇訳) 一九五七、二二頁
- (3) 谷岡武雄『人文地理学序説』雄渾社、一九五五、五九、二二一頁
- (4) Russell, R. J.: "Geographical Geomorphology," A. A. G. 39, 1949, pp. 1~110.
- (5) 中野尊正『日本の平野』古今書院、一九五六
- (6) 日下雅義『平野の地形環境』古今書院、一九七三
- (7) 和歌山市教育委員会『和歌山市太田・黒田地域総合調査地理・歴史調査概報』(服部昌之氏と分担執筆)、一九六九
- (8) たとえば「近飛鳥の地理的環境」大阪府教育委員会 一九七二、「田辺廃寺近傍の地理的環境」大阪府教育委員会 一九七二、「誉田白鳥遺跡付近の地形環境」大阪府教育委員会 一九七三、「はさみ山遺跡周辺の地形的環境」『古代を考える一』、一九七五 「平尾遺跡周辺の地形的環境」『古代を考える二』、一九七六 「磯長谷の地形学的考察」『古代を考える三』 一九七六
- (9) 日下雅義 「応神天皇陵近傍の地形環境」『考古学研究二 一―三』 一九七五 六七―八四頁
- (10) 花粉分析は広島大学の安田喜憲氏、建物の年代については野上丈助氏のほか、大阪府教育委員会の方がたによる。
- (11) Kraft, J. C. et al. "Late Holocene Paleogeography of the Coastal Plain of the Gulf of Messenia, Greece, and Its Relationships to Archaeological Settings and Coastal Changes," Geol. Soc. Am. Bull. 86: 1975. pp. 1191-1208
- (12) 日下雅義 「地理学」江上波夫監修『考古学セミナー』山川出版社 一九七六、三三二―三三五頁
- (13) 日本考古学協会 日本考古学協会昭和五三年度大研究発表要旨 一九七八、その他